

竹林寺山の四季



渡邊悦二

岡山天体物理観測所 助教授

動物編

岡山天体物理観測所は海拔370mの竹林寺山の頂上にあり、付近一帯は殆ど赤松の林である。周辺には、これといった高い山もなく、山陽沿岸地方特有の200～300mの低丘陵が続く。天気の良い日には、南は瀬戸内海の島々、四国山脈の山並、北は鳥取県の伯耆大山等が遠望できる。月夜には、海面が白く光り、瀬戸の島々、行き来する船がシルエットとなり、昼間とは又違った風情をみせる。夜景というと、一般的には人工灯の美しさであろうが、天文台からの夜景も、最近非常に美しくなった。光学天文観測にとっては困ったもので、「いい眺めだ!」と、素直によるこんでいられない。

早春ウグイスは、まだケキョケキョとまことにぎこちない声で鳴いているが(冬の間はチャッ、チャッと地鳴きしかしない)つつじの花が咲くころになると、ようやく練習の成果が上がったか、わが世の春とばかり滑らかな美しい声を聞かせてくれる。ドームから研究室のほうへ歩いていると、驚くほどすぐ近くの雑木林の中で、よく通る声で鳴くが、案外姿を見せない。ホウジロも又このころになると、松の一番高い新芽の先に止まって、口を大きく上に向け一日中さえずっている。聞きなし(鳴き声のたとえ)も色々あるが、有名なのは「一筆啓上つかまつり候」というのがある。岡山地方では「源氏ツツジ、白ツツジ」とも云う。

ゴールデンウィーク頃になると、春蝉(学名)の声でよく起こされる。ツクツクホウシに似た透明な羽を持った蝉で、ただ「ガーガー」となくだけで、とても優雅な声とはいえない。この春蝉は、曇っているときは何故か鳴かない。陽がさすと一斉に鳴きだす。里にはいないのでこの地方の人も案外春蝉を知らない。五月も中旬になると、威勢のいいホトトギスがやってくる。全山聞こえ渡るような大きなけたたましい声で鳴き、聞きなしが、あの早口言葉の「東京特許許可局」とよくいわれる。岡山観測所では誰が造ったのか(気を悪くする人がいたら困るが)「ちゃんてっぺん禿げたか?」だという。そのつもりで聞くと、そう聞こえるから不思議である。きりっとした目、端正な姿、しかし見かけによらない横着者で、よくウグイスに托卵し、自分では育て

ない。ウグイスもウグイスで、自分より大きなホトトギスの雛にせっせと餌を運ぶ。観測中、ドームのベランダに出て星を眺めていると、時々鳴きながら飛んでいく。早朝鳴くことが多いが、夜中も時々鳴いている。相前後して、ヨタカが洗濯板を叩いたような声で鳴く。一度聞くと忘れない。昼間は林の中で寝ているため、なかなか見ることは出来ないが、なんとグロテスクな気持ちの悪い姿と色をしている。夜中に歩いていると、すぐそばを羽音を立てて飛んでいく。あまり気持ちのよいものではない。漢字で夜鷹と書くが、名前に似ず飛んでいる虫を餌にしている。江戸時代にはヨタカはあまりよい例に使われなかったが、夜行性というばかりでなく、姿、色からも嫌われた気がする。

梅雨になると、毎日霧がすっぱり覆い、外界から切り離された感じになる。特に、霧雨がしとしと降り、濃霧がたち込め、10m先も見えなくなるような夜、一人で山にいるとなんとなく心細くなるものである。ずっと昔のそんなある夜、外に出てみると松林の中で誰かが口笛を吹く。低い単調な音、ただヒューと2、3秒間聞こえるだけ。また4、5分してヒュー。まさか、こんな夜更けに誰が林に！全くうす気味悪く、その夜早々にベッドに引き上げたことを覚えている。翌日それはトラツグミ（別名ぬえ）とわかった。ああ、この鳥が有名な「ぬえ」かと、それまで本で知ってはいたが、そのときは思い出さなかった。「ぬえ」は源頼政が退治したという怪物で、鳴き声は「ぬえ」の声だったという。又悲しげな声なので万葉集では片恋の枕詞として使われている。その他平家物語、世阿弥の能等にもでてくる。又、俗にいう「ぬえ的存在」のそれだった。その後、たまに随分離れている2匹が、かけあって鳴いているのを聞いたことがある。2匹の音程がすこしずれているので、調子っぱずれであるのがなんとも怪しく、又悲しく聞こえる。こんな濃霧の夜、窓からもれた明りをめざして（無論天文台は明かりを外にもらしてはまずいのだが）、オオミズアオという美しい大型の「蛾」が飛んでくる。淡いブルー色で、小さい丸い紋が4つある。あまりに美しいので、剥製にしてそっと持っている。しかし近年見たことがない。くぬぎの葉が好物であるが、近くのくぬぎの木が無くなった為であろうか。季節は違いますが、秋にな

ると、時々「ヤママユ」が飛んでくる。これもオオミズアオとちょうど同じくらいの大きさの蛾で、同じく紋が4つある。全体は茶色で、あまり美しい蛾ではない。4月に孵化し、6月下旬に蛹になるが、繭は目の覚めるような鮮やかなライトグリーンで、上質の天蚕糸がとれるので珍重され、最近飼養されている。時々自然に多量に見つかり新聞をにぎわすこともある。

天文台山系に限らず付近一帯の松林は、松くい虫の被害が多く、全滅しているひどい山もある。そのために、毎年、5、6月の2回に分けてヘリコプターによる殺虫剤の空中散布が行われる。マツノザイセンチュウ（1mm前後、自分では移動できない）を運ぶカミキリムシを駆除するためであるが、同時に多くの生き物も殺してしまう。空中散布の後、スズメバチが道路上でうごめいているのを見つけ、ぞっとした。最近では、松くい虫の被害がひどいのは、酸性雨の為だとか、工場の煤煙とかいろいろ言われ、空中散布も減ってきた。その為か一時減っていた小鳥がここ1、2年増えたように思われる。

冬の天文台は大変殺風景であるが、それでも天気の良い日にはメジロ、エナガ、シジュウカラと一緒に群れをつくり、殆ど同じ時間帯に同じコースを通っていく。ドーム付近の椿、山茶花の花によく群れている。アオゲラ、コゲラのキツツキ類はとてもきれいで、しかもしぐさがなんともおもしろいが、構内の電柱に穴をあけ、時々交換の憂き目にあう。その他ツグミ、シロハラ、カケス、



図4 - 1 青ゲラ

ジョウビタキ、イカルとけっこうにぎやかである。

小動物も冬には私たちの前によく姿を見せる。野兎はドーム付近にも多く生息し、時々姿を現す(図4-2参照)。狸は道路を歩いているのをよく見かける。昨年の冬、夜中に帰宅途中、カーブを曲がったとたん親子連れ5匹の狸に出くわし、急ブレーキを掛けたが間に合わず、1匹をはねてしまった。鈍い音がし、よたよたしながら雑木林に入ってしまった。付近を探したがみつからない。なんとも可愛そうで寝つきが悪い夜だった。狐もいるとのことだが姿は殆どみせない。猪は以前、大変多く生息し、里のほうではかなりの被害が出ていたが、最近ではめっきり減った。その頃、構内のテニスコートにまく塩化マグネシウムを時々なめにやってきていたが、足跡も滅多に見られなくなった。

観測所付近には特別珍しい生き物は生息していないが、四季折々、色々な小鳥がやってくる。最近、岡山に来られる方はとても忙しそうで、観測、睡眠以外の時間は計算機に追われ、あるいは持参した宿題に追われ、大変仕事熱心である。気分転換にたまには少し自然に親しみ、散策などされてはいかがでしょうか。



図4-2 188cm反射望遠鏡ドーム前に現れた兎

草木編

岡山天体物理観測所のある竹林寺山は、海岸より10km程内陸に入り、中国山脈と四国山脈に囲まれた気候温暖な地にある。又、瀬戸内の海がいつそう



図4-3 笹百合

急激な気象変化を和らげてくれる。2kmほど東の峰つづきの遙照山には中世頃、巖蓮寺と48坊もの山上伽藍がありこの地方の山岳仏教の中心地であった。いまでも薬師如来と釈迦如来が二仏一体になった石仏が薬師院に祀られている。縁日には多くの信者が登ってくる。また、天文台のある通称竹林寺山は市平山と呼ばれ、寛文年間廃寺となった竹林寺があった。今も、それらの遺跡が方々にあり、出土品も多い。いずれにしてもこの山系一帯は当時そうとう賑やかであったらしい。

早春、優しいこぼれ陽が射す林の中で、春蘭がひっそりと咲いている。昔から幽玄と枯淡の味を愛され、よく栽培されてきた。この雰囲気こそがこの地方では「ジジババ」と呼ぶ。林の奥に入ると、アセビの花が壺状の房を多数下向きにして咲いている。馬が食べると苦しむので、馬酔木(あしび)の名がある。別の地方では鹿も食べられないところから、シシクワズとも云うらしい。殆どは白花であるが、時々赤花もある。春の陽射しが一段と強くなると、ワラビ、ゼンマイ、タラの芽と山菜の季節となる。しかし嫌われもののマムシが活動をはじめると、山菜採りは注意が必要である。

5月にもなると、風の強い日が多い。この季節、松の花粉が飛び、車の屋根は薄黄色になる。夜は露で飛ばないため、夜間観測用の鏡類は比較的きれいだが、太陽望遠鏡の鏡、ドームの床等はそれはもう誠に汚くなる。杉の花粉症の人は多いが、松の花粉症の人はいないのだろうか？

霧が立ちこめる梅雨の頃、竹林寺山系の北側頂上付近で、この地方では珍しいササユリが咲く（図4 - 3参照）。葉がササの葉に似ていることからササユリといわれるが、淡いピンクをした質素なユリである。野にあるときには、ほんのりといい匂いがするが、5～6本も部屋に生けると少し強すぎて気分が悪くなる。ササユリの生育環境は微妙で、同じ山系のほんの少し南に移植するだけでもだんだん退化して枯れてしまう。（ちなみに種をまくと花が咲くまでには6～7年かかる）蒸し暑い真夏になると、構内から少し離れた湿地に、鷺草が純白の可憐な花を咲かせる。自然の造形の巧みさとはいえ、誠に芸術品そのものである。こんなすがすがしい花が他にあるだろうか。一時暑さを忘れさせてくれる。そこはよく陽のあたるきれいな水が流れている湿地でちょっとした群落を作っている。しかし山野草ブームなのか、心ない者にごっそり持っていかれ、白鷺の群れとはいなくなかった。付近のトキ草、水苔も同様すっかり荒らされ少なくなってしまった。



図4 - 4 つるリンドウ

ススキの穂が秋風を運び彼岸も過ぎると、松茸の季節となる。構内および付近の赤松の林で、今でも少量ではあるが収穫があるようだ。しかし最近めっきり減り、観測者も時々入山するようだが、お土産にしよう等と考えてはいけない。運動のつもりで出かけるとよい。松茸以外の雑茸類もすっかりなくなってしまった。やはり酸性雨のためであろうか。ずっと昔、私も知らぬまま入った松林で松茸を見つけ、着ていた白衣を脱いで包み、肩に背負って帰ったことがあるが、もうそういうことは無いだろう。ちょうどこの頃、ナツハゼ（この地方では山なすびという）の実が熟れる。大豆くらい大きさであるが、艶のある黒褐色になったよく熟れた実は甘酸っぱくて美味しい。実のついた枝ぶりのよい木は、花生けによく使われる。いつの頃か、この山系も伐採の後に、ヤシャブシの木を植えたようだ。禿げ山に植林の為よく植えられるので、ハゲシバリと云われている。いたるところにあるが、10月になると青い楕円の実をつける。霜がくるようになるとだんだん茶色になり、落葉した木に実だけが残り翌年花が咲くまでいつまでも汚らしくぶらさがっている。茶色になる前の実は染料として使用され、実に渋い自然の薄茶の色合いに染まるらしい。ツルリンドウ（図4 - 4参照）、キキョウ、オミナエシ、ワレモコウ、ハギ等秋の草花がそろそろ終わる頃、構内のあちこちにセンブリが小さな花を咲かす。民間薬として一般的であるが、この花は美しいと云うよりほんとかわいい。ガラスコップにいけるとよく合う。冬の山の中は寂しいが、ヤブコウジの実だけがひとときわぼつんと赤く目をひく。どこにでもあるが、正月の寄せ植え用によく使われる。マンリョウ、センリョウに対してヤブコウジを十両と呼ぶ。百両はカラタチバナだそう。一月もなかばを過ぎると真っ赤な山椿が咲き出し、ドーム前の山茶花も咲き、小鳥達のさえずりが賑やかになってくる。もう春がそこまできている。ぽかぽかと暖かい日に、ゆっくり構内を散歩するのも、又楽しいものである。